

家庭科教員養成における模擬授業に関する一提案

山野 美咲^{*1} 吉野 真弓^{*2} 西田 真紀子^{*1}

^{*1}九州女子大学家政学部人間生活学科

北九州市八幡西区自由ヶ丘1-1 (〒807-8586)

^{*2}お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科

東京都文京区大塚2-1-1 (〒112-8610)

(2015年5月29日受付、2015年7月9日受理)

要旨

本研究は、「家庭科教育法Ⅲ」において家庭科の模擬授業を既に経験した3年次の学生の授業を、今後受講予定の2年次の学生に体験させることで、「自分が模擬授業をしているイメージが持てるか」、「今後の模擬授業への取り組み」への影響等を明らかにし、家庭科教員養成における模擬授業に関する一提案を目的としている。

対象は「家庭科教育法Ⅱ」履修者23名である。時期は2013年11月である。方法は対象者に模擬授業を体験する前後に質問紙票を実施した。

結果は以下のとおりである。

1. 模擬授業体験後の学生は、「自分の模擬授業をしているイメージ」がわき、「模擬授業への不安」や「教材づくりへの不安」が低下する傾向が見られた。
2. 模擬授業を体験したことにより、「今後の模擬授業への参加意欲」や、「教壇に立つイメージ」が高まった。
3. 模擬授業の体験は楽しい経験が得られると同時に、「先輩の模擬授業は勉強になった」と回答しているものが多かった。

これらのことから、上級生の模擬授業を体験することは、学生にとって効果的な側面がある可能性が示唆された。

1. はじめに

近年、教員の資質向上に対する社会的要望が高まっており、大学における教員養成の段階から、より実践的に活躍できる人材を育成することが求められている。

1997年の教育職員養成審議会の第一次答申「新たな時代に向けた教員養成の改善方策について」の中で、教員養成課程において「実践的指導力」を育成するための必要性が打ち出された¹⁾。また2006年に中央教育審議会は「今後の教員養成・免許制度の在り方」の答申の中で、「教職実践演習」を免許取得のための新しい科目として取り入れ、教職大学院の設置や教員免許更新制度の導入について言及している²⁾。この答申での「教職実践演習」は、教員の資質の構築

と定着を目的とし、特に教育実習は実践力をつけるために重要とされている。そのため教育実習の前段階となる大学等における各教科の模擬授業は、教員としての実践的な力をつけるひとつと位置付けられている。さらに 2012 年に中央教育審議会は「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」の中で、教員養成や教員免許制度の改革の方向性を示している³⁾。また現在、自民党教育再生実行本部が教員免許の「国家資格化」およびその後 2 年程度の現場での研修制度の導入を提言しており、教員の資質能力の向上はますます求められている。

家庭科においては、小・中・高等学校家庭科学習指導要領⁴⁾が、2008 年の中央教育審議会答申における教育課程の基準の改善の基本方針「実践的・体験的な学習活動を通して、家族と家庭の役割、生活に必要な衣、食、住、情報、産業等についての基礎的な理解と技能を養うとともに、それらを活用して課題を解決するために工夫し創造できる能力と実践的な態度の育成を重視する観点から、その内容の改善を図る」を踏まえ改訂されている。

このような社会が求める家庭科教員を養成するには、その養成段階から実践力をつけることが必要である。しかしながら、家庭科の教員養成は教員養成大学（教育学部）だけでなく家政学系大学つまり非教員養成大学（非教育学部）においても行われており、そのような家政学系の大学では家庭科の衣食住等の専門教育に関する授業は充実しているものの、教員養成は限られた時間や人材のなかで行わなければならない現状もある。こうした非教員養成大学のカリキュラムでは、教員養成大学で通常行われている子ども理解のための観察実習の時間を設けることが困難である。このような中で、教員に将来なるといった高いモチベーションをたもち、教育現場で通用する人材を育てるためには、限られた中での工夫、特に授業実践力を高める模擬授業が重要と言えよう。

家庭科に関する大学等における模擬授業に関する研究として、これまでに次のようなものがある。伊波⁵⁾は、マイクロティーチングの手法を参考に模擬授業を試行した結果、学生は自分の模擬授業よりも他者の模擬授業を高く評価する傾向があり、自己評価が低い結果となること、VTR による録画の観察を取り入れることで、学生は自分の模擬授業を客観視できる効果があることを述べている。また伊波⁶⁾は、模擬授業の授業記録について教授と学習活動の分析を行い、家庭科の模擬授業の特色および問題点に言及した。その中で、指導計画と実際に行った模擬授業では、教授と学習活動にずれが生じ、特に模擬授業を初めて行った学年に著しいと述べている。高木⁷⁾⁸⁾は、家庭科教師に求められる資質能力の枠組みを設定し、2 回の模擬授業実践を取り入れた教育法プログラムを開発し、模擬授業実践後の自己評価および相互評価から、家庭科授業づくりに関する学生の課題を分析した。その結果、学生が家庭科授業を構想し実践するために必要な課題を認識し、改善方策の適否を確認することができたと述べている。しかし、改善されたか否かが主に協議され、よりよい授業とするアイデアの提案や総合的な検討の様子はほとんど見られず、堀内⁹⁾も同様の指摘を行っている。そこで高木¹⁰⁾は、学生が

目標として意識できる指標を提示することにより、授業を評価する場面における見方の偏りが是正され、家庭科授業に対する評価内容の記述の質を高めたと述べている。さらに高木¹¹⁾は、教員養成課程における家庭科の指導に係わる資質能力の特徴と課題について分析している。

学生は家庭科の授業を小学校、中学校、高等学校と受けてきた経験があるものの、自ら授業者として教壇にたつことをイメージすることは難しく、児童生徒の実態を予想できにくいいため児童生徒への働きかけや適切な対応が難しいことが考えられる。また、大学での模擬授業は、学生にとっては初めての授業経験であり、模擬授業の観点がわからない学生も多いことが考えられる。さらに、授業内容に関する知識を習得している大学生が生徒役を行うため、実際の児童生徒にとっての課題が気づきにくい面もある。その上、教師・生徒役ともに通常は同学年で実施するため、友人同士の馴れ合いになる可能性も有り、実際の現場の授業の雰囲気になりにくい傾向がある。

特に非教員養成大学の場合、大学附属の小学校・中学校が併設されていないことも多いため、教育現場での児童・生徒理解のための観察実習の時間を得にくいこともあり、学生自身も模擬授業に対してどのように取り組んでいったらいいかイメージがつきにくい面がある。非教員養成大学での授業においては、そこで教員を養成するための模擬授業を意図的にかつ自分が教壇にたつイメージをもって取り組むことができるようにすることは重要だと考えた。

そこで本研究では、模擬授業をすでに経験した3年生が教師役として模擬授業を行い、模擬授業の経験のない2年生がその生徒役を体験することにより、これから学ぶ2年生の模擬授業への意欲や教育実習への取り組みなどへの意識を探ることで、大学での家庭科の模擬授業のあり方についての一助とすることを目的とする。

2. 方法

(1) 調査対象者：K 女子大学「家庭科教育法Ⅱ」履修者 23 名

(2) 調査時期：平成 25 年度後期授業期間中の平成 25 年 11 月中旬

(3) 授業および調査の実施方法

「家庭科教育法Ⅱ」は中学校・高等学校教諭一種免許状「家庭」取得のための教職に関する科目で、大学2年次後期開講科目となっており、調理および被服実習に関する実技能力の向上および模擬授業による教科指導における初歩的な実践力を育むことをねらいとしている。生徒役の学生 23 名は全員大学2年生であり、学校現場での授業の見学や模擬授業の経験はない。

教師役の3年生は、3年次前期開講科目の「家庭科教育法Ⅲ」において、4～5名で編成されたグループ単位で、50分間の模擬授業を実施した経験を持っている。

まず授業開始時に質問紙調査を行い、3年生による模擬授業（50分、中学校技術・家庭（家庭分野）授業名「新鮮な食品をみわけよう」）を生徒役として参加した後、授業開始時に行った質問紙と同じもので調査を行った。模擬授業前および模擬授業後の有効回収数はともに 23、

有効回答率は 100% であった。

(4) 分析の視点

①模擬授業を体験することにより自分が行う模擬授業のイメージが持てるか、②模擬授業への意欲が高まり、自分が教壇に立つイメージが持てるようになるか、③模擬授業を受けることによって家庭科教員になることへ意識が変わるか、④教育実習への不安が低下するののかの 4 点について、模擬授業参加前後に質問紙調査を実施し、分析を行った。統計解析には SPSS ver20.0 を使い、クロス集計では χ^2 検定を行った。

3. 結果

家庭科教員の免許を取得するにあたり、家庭科の授業を自分がしているイメージができるかどうかたずねたところ、模擬授業前は「とてもイメージできる」と「わりとイメージできる」と回答した者が 9 名 (39.1%) であり、模擬授業後は 15 名 (65.2%) であった (図 1)。統計的に有意な差はみられなかったものの、模擬授業を体験した後は高い値を示していた。

来年度模擬授業を教師役として行う「家庭科教育法Ⅲ・Ⅳ」を受講するにあたり、教材づくりの不安の程度についてたずねたところ、模擬授業前には「とても不安」と回答した者が 17 名 (73.9%) に対して、模擬授業後は 12 名 (52.2%) であった (図 2)。教材づくりに対し「とても不安」と回答した者が減少している傾向が見られたが、7 割以上の学生が不安を感じていた。

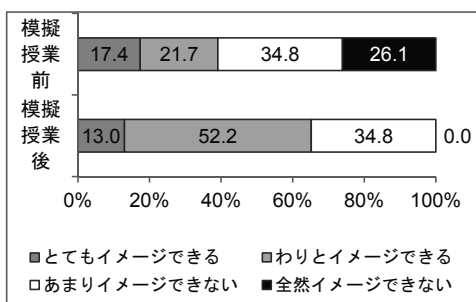


図 1. 家庭科の授業をしているイメージ (N=23) n.s

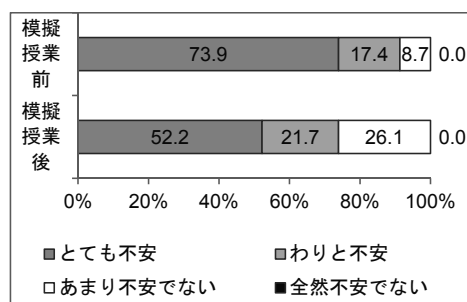


図 2. 教材作りへの不安 (N=23) n.s

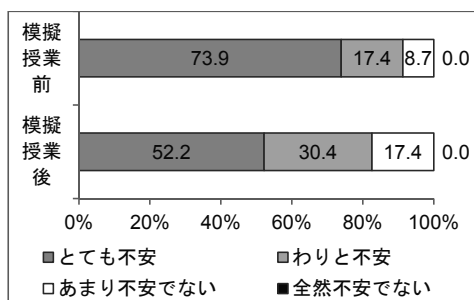


図 3. 模擬授業をすることへの不安 (N=23) n.s

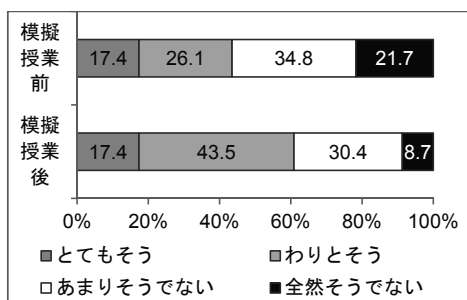


図 4. 模擬授業をすることへの楽しみ (N=23) n.s

自分が模擬授業をすることの不安の程度についてたずねたところ、模擬授業前は「とても不安」と回答した者が17名(73.9%)であり、模擬授業後は12名(52.2%)であった(図3)。模擬授業をすることが「とても不安」と回答した者が減少している傾向が見られたが、8割以上の学生が何らかの不安を感じていた。

逆に、模擬授業をすることに対する楽しみの程度をたずねたところ、「とてもそう」と「わりとそう」と回答した者が、模擬授業前は10名(43.5%)、模擬授業後は14名(60.9%)であった(図4)。模擬授業を体験した後は模擬授業をすることに楽しみを見いだせる傾向が見られた。

「先輩の模擬授業は楽しみか(楽しかったか)」についてたずねたところ、模擬授業前は「とてもそう」と回答した者が7名(31.8%)だったのが、模擬授業後は17名(73.9%)であった(図5)。統計的に有意な差が見られた。先輩の模擬授業のおもしろさが伝わった結果が導きだされた。

「先輩の模擬授業を体験することは、勉強になるか(なったか)」についてたずねたところ、「とてもそう思う」と回答した者は、授業前後ともに約8割と高い数字であった(図6)。

自分が教壇にたつイメージが持てたかについてたずねたところ、模擬授業前は「とてもイメージがわいた」と「わりとわいた」と回答した者を合わせると9名(39.1%)であり、模擬授業後は13名(56.5%)となり、模擬授業のイメージがわいた者が増えた傾向にある(図7)。

さらに、自分が今後模擬授業をすることは難しいと思うかたずねたところ、模擬授業前は「と

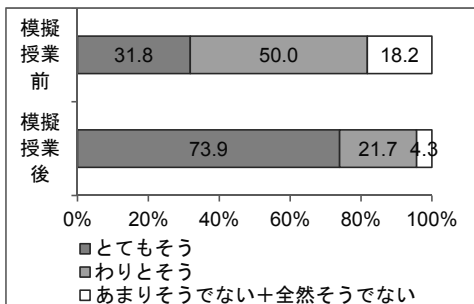


図5. 先輩の模擬授業は楽しみか
(N=23) $P<.05$

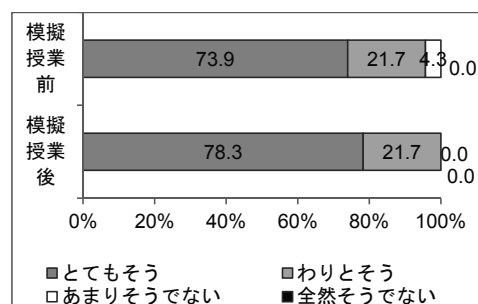


図6. 先輩の模擬授業を体験することは勉強になるか
(N=23) n.s

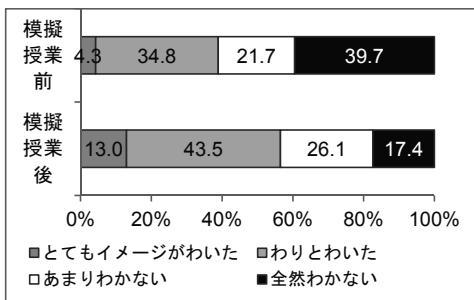


図7. 教壇にたつイメージが持てたか
(N=23) n.s

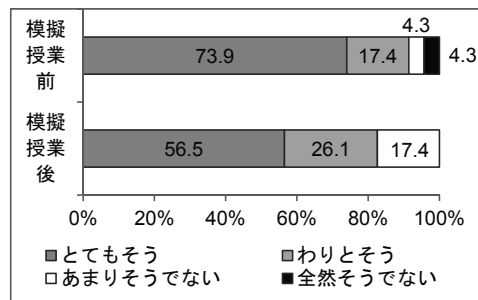


図8. 今後模擬授業をすることは難しいと思うか
(N=23) n.s

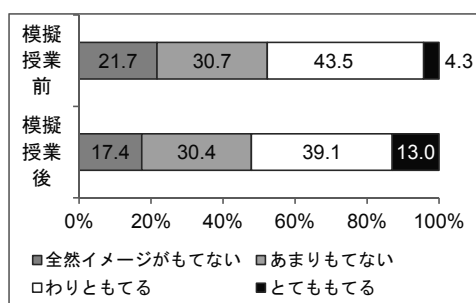


図 9. 教育実習に行くイメージが持てたか (N=23) n.s

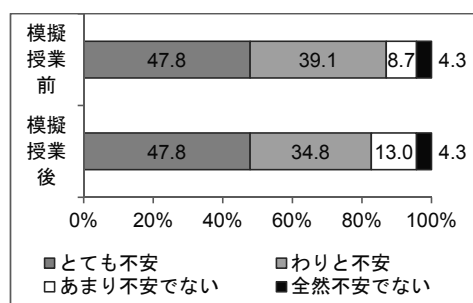


図 10. 教育実習についての不安 (N=23) n.s

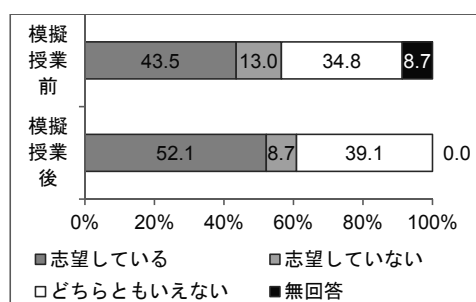


図 11. 家庭科教員の志望の有無 (N=23)

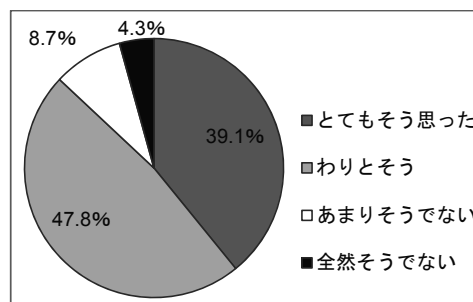


図 12. 模擬授業後の授業参加意欲 (N=23)

でもそう」と回答した者が 17 名 (73.9%) であり、模擬授業後には 13 名 (56.5%) であった (図 8)。

模擬授業を体験することによって、教育実習へ行くイメージが持てる (持てた) かについてたずねたところ、模擬授業前は「全然持てない」と「あまり持てない」と回答した者を合わせると 12 名 (52.4%) であり、模擬授業後は 11 名 (47.8%) であり、ほとんど変化が見られなかった (図 9)。

「教育実習に行くことが不安であるか」についてたずねたところ、模擬授業前は「とても不安」と「わりと不安」と回答した者は 20 名 (86.9%)、模擬授業後は 19 名 (82.6%) であり、ほとんど変化が見られなかった (図 10)。

家庭科の教員志望についてたずねたのが図 11 である。家庭科教員を志望している者は、模擬授業前で 10 名 (43.5%) であり、模擬授業後で 12 名 (52.1%) であった。志望意欲が変化した者を見ると、模擬授業前には「志望していない」「どちらでもない」と回答した者で模擬授業後に「志望している」と志望意欲が向上した者は 6 名 (26.1%) であり、模擬授業前には「志望している」と回答した者で模擬授業後に「志望していない」「どちらでもない」と志望意欲が低下した者は 3 名 (11.5%) であった。

来年度模擬授業を教師役として行う「家庭科教育法Ⅲ・Ⅳ」を受講するにあたっての参加意欲についてたずねたところ、「とてもそう思った」と回答した者が 9 名 (39.1%)、「わりとそ

う思った」と回答した者が11名(47.8%)であり、合わせると約9割が参加意欲を示していた(図12)。

4. 考察

初めて模擬授業を体験する学生にとっては、上級生が行う模擬授業を生徒役として体験することにより、その授業者の姿を今後の自分の姿と照らし合わせることができ、今後自らが授業をする姿をイメージすることができた。また、自分が模擬授業をすることの不安感や教材づくりの不安感が低下する傾向が見られ、それらの不安を軽減させる可能性があることが示唆された。模擬授業を体験することにより教壇に立つ自分の姿のイメージをもつことができ、今後の「家庭科教育法Ⅲ・Ⅳ」の授業にも積極的に参加しようとの意識が見られた。また上級生の模擬授業を楽しく体験することは勉強となり、さらに自分が模擬授業をすることの難しさに気づくことにつながった。

1回の模擬授業の体験では、教育実習のイメージを持つことやその不安を取り除くにはいたらなかった。将来の家庭科教員志望に関しては、模擬授業体験後に23名中6名が志望するようになり、授業づくりに良い印象をもてたことが予想される一方、教壇へ立つことや授業づくりへの不安等により3名が志望しないようになり、将来の教員志望への影響を及ぼす可能性があることが示唆された。

非教員養成大学においては、模擬授業に対する意識づけは難しい側面がある。しかし今回のような試みをすることにより、2年生の段階でより高い実践的指導力についての意識が持てるようになる可能性があると考ええる。また、非教員養成大学では、4年生で教育実習に行くことが多いため、3年生に模擬授業が計画されている場合がある。また生徒理解などの為の観察実習がなく、教育実習にいはじめて生徒とふれるといった状況がある中で、2年生の段階から教員としての意識づけのために3年生の模擬授業を観察することは、限られた教員養成の環境の中でも実践的な教員を養成するニーズに見合う、ひとつの方法となりうることが示唆された。

5. おわりに

本研究では、大学での家庭科の模擬授業のあり方についての一助とすることを目的として、中学校・高等学校家庭科教員免許取得をめざし「家庭科教育法Ⅱ」を履修している大学2年生23名に、模擬授業をすでに経験した3年生が教師役として行う模擬授業に生徒役として参加させ、その前後に質問紙調査を実施し、これから学ぶ2年生の模擬授業への意欲や教育実習への取り組みなどの意識を探った。

その結果、大学の家庭科教育法の模擬授業をする際に学年を超えて授業を行うことは、下級生にとっては、模擬授業のイメージづけをさせ、授業に取り組む熱意の動機づけにつながる可

能性が示唆された。また、観察実習等の体験に乏しい非教員養成大学においては、上級生が行う模擬授業を体験しておくことは、自分が模擬授業に取り組む際の動機づけになることが示された。今後の課題としては、教壇に立つことへの不安を払拭するための工夫が必要であり、K女子大学での一授業の模擬授業であるため一般化するためには今後さらにケースを積み重ねていく必要がある。

引用文献

- 1) 文部科学省. 「新たな時代に向けた教員養成改善方策について」(教育職員養成審議会第一次答申). 1997.
- 2) 文部科学省. 「今後の教員養成・免許制度の在り方について」(中央教育審議会答申). 2006.
- 3) 文部科学省. 「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」. 2012.
- 4) 文部科学省. 中学校学習指導要領解説 技術・家庭編. 2008, p3
- 5) 伊波富久美・福田公子. 家庭科教員養成における模擬授業に関する一考察—基礎的教授技術の試行とその評価—. 日本家庭科教育学会誌 31(3), 1988, p47-53
- 6) 伊波富久美. 家庭科の模擬授業における教授—学習活動の分析. 長崎大学教育学部教科教育学研究報告 16, 1991, p99-111
- 7) 高木幸子. 家庭科教員養成における模擬授業を取り入れた教育法プログラムの検討(第1報)—模擬授業実践による学生の課題認識の分析—. 日本家庭科教育学会誌 49(4), 2007, p256-267
- 8) 高木幸子. 家庭科教員養成における模擬授業を取り入れた教育法プログラムの検討(第2報)—学生が認識した課題への取り組みと改善状況—. 日本家庭科教育学会誌 49(4), 2007, p 268-278
- 9) 堀内かおる. 家庭科教員養成における模擬授業の有効性—コメント・レポートによる相互評価に着目して—. 日本家庭科教育学会誌 51(3), 2008, p169-179
- 10) 高木幸子. 目標の提示による家庭科授業に対する評価内容の変容. 新潟大学教育人間科学部紀要 10(1), 2007, p49-56
- 11) 青木幸子. 授業評価に見る教職課程履修学生の指導能力の向上—模擬授業と研究授業の比較を通して—. 日本家庭科教育学会誌 57(3), 2014, p 174-183

A Proposal for Trial Lesson in Teacher Training Class of Junior High School Home Economics Education

Misaki YAMANO *¹ Mayumi YOSHINO *² Makiko NISHIDA *¹

*¹ Department of Human Life Studies, Faculty of Home Economics,

Kyushu Women's University

1-1 Jiyugaoka, Yahatanishi-ku, Kitakyusyu-shi, Fukuoka, 807-8586, Japan

*² Graduate School of Humanities and Sciences, Ochanomizu University

2-1-1 Otsuka, Bunkyo-ku, Tokyo, 112-8610, Japan

The aim of this studies are to make clear of next effects, "whether or not to be some images of teaching trial lesson" and "plan for teaching trial lesson in future", through making second grade to experience the trial lesson by third grade students, who already practiced trial lesson, in "Home Economics Teaching Lesson III". In addition it is purpose too that the trial lesson method is proposed by this studies in rearing of home economics teachers.

The subjects were 23 students who have taken "Home Economics Teaching Lesson II" in November 2013. The research method was questionnaires wrote before and after the trial teaching lessons.

The results are following contents.

1. Students who take the trial lesson could have "image of trial lesson", and have tendency to decrease "anxious for trial lessen" and "making of teaching materials".
2. "Desires for participation in trial lessons" and "images standing as teacher" have been increased by experience of trial lesson.
3. It is interesting to experience trial lessons. In addition there are many answers of "trial lesson of third grade students are interesting".

From the above, it is recommended that there are possibilities to be effective for students by experience of third grade's trial lesson.

Key words: a trial lessen, teacher training class of junior high school home economics education, home economics teacher training , the method of teacher training of home economics.